

〈書評〉

謝必震『中国与琉球』（厦門大学出版社,1996年）

帆 刈 浩 之

ここ数年、琉球・沖縄に関する歴史研究は活況を呈している。そして、琉球と日本（地域としては長崎・薩摩・江戸など）、中国（福建・江蘇・浙江など）、朝鮮、東南アジアとの間の交流史に関する研究が多数行われている点が特徴的である。琉球がアジアとの交流の中で蓄積してきたノウハウやネットワークが如何なるものであったのか、興味深い問題である。このことは同時に今後の沖縄の未来像をどう描くのかという現実的な課題としても提起されていると思われる。

一方、中国ではこれまで福建省の研究者を中心に中国・琉球交流史に関して多くの優れた研究がなされてきた。本書の作者である謝必震氏も福建師範大学に籍を置き、中琉関係史の研究に従事する若手研究者である。ひとまず、本書の内容を紹介しておく。

- 第一章 中国史籍中的琉球
- 第二章 閩人三十六姓移居琉球
- 第三章 中国对琉球的冊封
- 第四章 中国人眼中的琉球社会
- 第五章 琉球使団在中国
- 第六章 中国的琉球墓与琉球的唐人墓
- 第七章 明清中琉貿易
- 第八章 琉球留学生来華
- 第九章 中国文化在琉球
- 第十章 “球案”及其影響

第一章では、中琉関係史研究において中国側の基本的資料となる漢籍を紹介している。それは、大きく、①正史、②『明実録』『清実録』、③冊封使の著作、④通典・通考・志書・筆記・小説などの、その他の古籍、という四つに分類される。②の『実録』には琉球の朝貢、中国による冊封、琉球人・福建人の活動、対琉球優遇政策などの内容が記載されている。

第二章は明朝によって派遣された閩人三十六姓の実像および活動の歴史的意義について考察したもの。琉球の明朝に対する朝貢貿易を促進する上で、また琉球の社会発展にとって、彼らが果たした役割が高く評価されている。

第三章では冊封の由来、使節団の構成、冊封船の建造とその航路、使節の琉球における活動と影響、海禁と冊封との関係など、琉球の冊封全般にわたる問題を考察している。

第四章は冊封使による著作に描かれた当時の琉球社会を、政治制度、生産力・生産関係、宗教・民間

習俗、文化・芸術・教育制度などの面から紹介・分析し、資料としての使録の重要性を指摘する。

第五章は琉球の朝貢使節団について、その構成、中国での活動、福州から北京までのルートが詳細に検討されている。そこでは、琉球側の要求によって規模が拡大していったこと、明中期以降に出現した接貢制度は中琉貿易の機会の増加を意図していたことなどが示されている。

第六章は交流史の影の部分、すなわち異国の地で亡くなった使節や留学生、そして遭難者たち（の墓碑など）が語る交流史である。中国における琉球墓は、①福州、②北京への途上、③北京通州張家湾、④東南沿海地区に分布している。朝貢途上で病死したような琉球人の多くが閩人の末裔であるため、故郷福州に安葬されることを希望したという。一方、沖縄に残る唐人墓は恩納村、石垣市にあり、琉球に漂着した福建商人および華工が永眠している。

第七章で扱う中琉貿易は中琉関係史において重要なテーマの一つである。それは形式的には朝貢貿易と私人貿易とに分けられ（その性質から見ると官方貿易と民間貿易に分けることができる）、前者が主要な形式であったが、合法・違法を含めた私人貿易の比率は相当大きかった。そして琉球は中国と東南アジアの商品価格差を利用した中継貿易によって巨万の富を獲得したのである。さらに中琉貿易の進展は福建・琉球双方の経済発展をも促すという側面も有したのである。

第八章は中国へ渡航した琉球人留学生に関して、学習内容、生活、中国側の受入体制などが具体的に紹介されている。また、帰国後、琉球の歴史に大きな影響を与えた人物の略伝が記されている。

第九章では、冊封使、朝貢使節、閩人三十六姓、留学生、漂流民などの移動に伴って、中国文化が琉球に伝えられ大きな影響を琉球社会に与えたことが紹介されている。それは言語、文学、芸術、建築、教育、医学、宗教、生活習慣、生産技術など多岐にわたった。

最終章の第十章は“球案”、すなわち「琉球処分」をめぐる日・中・琉の外交交渉をあとづけたもので、この事件によって約五百年に及んだ中琉友好関係に終止符が打たれたとする。

以上、本書は中琉関係史を様々な角度から紹介しており、個別に検討すべきテーマが豊富に提起されている。しかし、評者の能力および紙幅の関係上、ここでは中琉貿易にテーマを絞って検討を加えてみたい。

中琉貿易の歴史的性格を考える際、いわゆる閩人三十六姓の再検討が一つのヒントを提供してくれる。議論の詳細は省略するが、たとえば洪武二十五年に明の太祖洪武帝が琉球国へ閩人三十六姓を下賜したという、これまでの通説は、後世に「華僑アイデンティティを回復し宗族意識を強めるために」意図的に強調された系譜観念であるとされている（真栄平房昭「対外関係における華僑と国家－琉球の閩人三十六姓をめぐる－」 荒野泰典ほか編『アジアのなかの日本史Ⅲ海上の道』東京大学出版会、1992年）。

それでは、実態はどのようなものであったのか。まず、私たちの視点を官の側から民間の側へと移行させる必要がある。三十六姓の問題は、皇帝による「公式的」派遣という事件としてではなく、三十六姓が琉球に来る以前から、すでに相当数の福建人が琉球に移り住んでいた事実を踏まえ、ゆっくりではあるが連綿と続いた閩人の琉球への移民過程の中に位置づける作業が必要であると思われる。これは朝貢貿易が儀礼的な側面と同時に、自己利益追求という実質的な側面をも合わせ持っていたこととも関連するであろう。

様々な側面を有する中琉関係史ではあるが、その基調となるものは交易関係である。そして、主として朝貢の制度的側面から中琉間の交易史が検討されてきた。さらに、琉球はシャムやマラッカなど、東南アジアの各地と交易を行ったように、東中国海と南中国海とを中継する位置を占め、琉球ネットワークとも呼ぶべき交易関係を形成していたことが指摘されている。

『歴代宝案』によると、その琉球ネットワークは、十五世紀前半から十六世紀中葉にかけて東南アジアとの交易が多く、十六世紀中葉以降になると朝鮮や日本との交易が増大するという傾向を示している（濱下武志「海域史研究と琉球の位置」『第四回琉中歴史関係国際学術会議 琉中歴史関係論文集』1993年、琉球中国関係国際学術会議編集・発行）。その背景としては十六世紀後半以降、アジアに登場してきたスペイン・ポルトガル・オランダが果たした役割が検討される必要がある。東アジア・東南アジアの海域をめぐる交易関係の変容にともなって、中琉貿易の内実がどのように変化したのか、という問題が提起されるであろう。

このように東アジア・東南アジアの海域という広域地域における中琉貿易の位置づけという問題のほかに、中琉貿易が地域の経済に如何なる影響を与えたのかという課題も重要である。この点に関して、作者は中琉貿易の拡大にともない、福建における商品市場が活性化した事実を指摘している。

その一例として、中国から琉球へと戻る琉球船が必ず持ち帰った商品、すなわち中国薬材がある。また、琉球へ赴いた冊封船も大量の薬材を携行していた。規定では使節の随行員は百斤まで自己の商品を搭載でき、一般的に薬材が携行品の半分以上を占めていた（その他、絹織物、文具など）。そして、同治五年、清朝最後の冊封使節の随行員38人中、13人が薬材だけを百斤以上携行してきたのであった。ここから、琉球における中国薬材に対する需要の大きさが窺える。この中国薬材の多くは福建産ではなく、国内の流通網を經由して福建薬材市場へと集荷されたのである。

さて、琉球に運ばれた中国薬材は琉球で消費されたのではなく、さらに薩摩を經由して大阪・富山へと運ばれていった。そして、この薬材輸入の見返りとして大量の北海道産昆布が沖縄を經由して中国へ輸出されたのである。その流通過程にあつて富山の製薬業者が昆布を薩摩へと輸送していたことが知られている（大石圭一ほか、「周益湘著「道光以後中琉貿易的統計」の研究」『南島史学』25・26、1985）。こうして中国国内の中国薬材市場と日本の昆布市場とが琉球を通してつながっていたことがわかる。結局、中琉貿易はその前提として東アジアや東南アジア各地の巨大な商品市場の存在があり、その交易ネットワークの一つの中軸として位置づけられるであろう。このように多角的に展開していた交易ネットワークは中国商人・琉球商人・日本商人によって担われていたと考えられるが、その実態に関しては今後の課題である。

このように東アジアにおいて歴史的に琉球が果たしてきた中継的機能は顕著であるが、日本や朝鮮が中国と琉球の文化交流を仲介していたという指摘は興味深い。琉球は日本や朝鮮との交易を通して、仏教・道教・儒教の経籍、文房四宝などを入手しており、いわば間接的に中国文化を摂取したのである。琉球の側からみれば、朝貢貿易に限定されない多角的な交易関係の形成が選択されたものといえよう。

『中国と琉球』という書名は実はその言外に日本・朝鮮、そして東南アジア諸国との密接な関係が意図されているべきであろう。東アジア全体の平和が実現されていなければ、中琉間の友好関係はあり得ないのである。